

『サケと人間の関わりー過去・現在・未来』（要録）

コーディネーター： 北海道大学教授 上田 宏 氏

パネリスト：太田 昇（おびひろサケの会会長），市村政樹（標津サーモン科学館学芸員），鈴木俊哉（水産総合研究センター主任研究員），河村 博（北海道水産孵化場副場長），阿部滋（北海道定置漁業協会会長），山道正克（日本釣振興会北海道支部副支部長），高田直幸（丸水札幌中央水産株式会社常務）の各氏

（発言内容が名前とともに HP にのることを好まないパネリストの方もおられるので，以下の要録では発言者をアルファベットで表した。）

上田：各組織からサケとの関わり合い，ネットワークへの期待を述べてもらい，今後どのような形で連携を取れるのかについて論議したい。

- A：生きている川，サケが自然産卵できる川を目指して水質調査，食育情報の提供等を行っている。密漁対策として釣り団体と協調できないか。アメリカではコーストガードが取り締まっている。
- B：定置協会は，道庁から許可を受けている 995 カ統の代表者で組織。平成 19 年から，10 億尾にのぼるサケ稚魚放流の 85% は民間が担っている。現在の回帰は 5 千万尾前後。フィレーが国内消費に貢献。しかし，国産サケが輸出され，外国産サケが輸入されているのが現状。適正な価格でサケを食べてもらいたい。定置網はサケを再生産できる漁法なので，今後もこの漁法を残したい。
- C：国内の定置網の漁獲は 15-16 万トンだが，40 万トンが輸入され，国産は輸出されているのが現状。流通業界としては，安全なサケを子供に広めたい。中国等諸外国で魚肉の需要が高まっており，将来日本が魚を輸入したくてもできない状況が懸念される。サケは持続的再生産が可能な魚種なので，定置網と増殖事業は守る必要がある。業界が纏まり，消費者に受け入れられる活動の展開が必要。例えば，食育を含めた子供向け料理教室を開いている。
- D：活動内容はサーモン協会の会報そのもの。科学館に訪れる様々な人にサケとは何かを伝えている。実習活動から子供が魚のことを知らないことを痛感。ネットワークを通じ色々な情報交換をしたい。
- E：人工孵化放流の歴史は，古くは種川の制に始まり，千歳の官営ふ化場を経て現在に至る。その間様々な研究と技術開発が行われ，1970 年代以降は給餌放流と適期放流の開始とともに，レジームシフトにともなう海洋環境の好転により資源が増えた。北海道としては関係団体に放流数の増大を呼びかけた。科学的データに基づいた増殖技術開発が必要。例えば，サケ稚魚の沖合移動サイズである 3 g から逆算した放流計画の作成や，沿岸における減耗要因として意外に大きかった鳥への対策等。
- F：過去の増殖技術開発は，北海道と国がタイアップして行い，資源増大へ結び付けた。今年度から，さけ・ます資源管理センターはさけますセンターに改組されたことにともない，サケを資源としてだけではなく生き物として捉える方向へ，また孵化放流中心の業務から保全に目を向けた業務へ，あるいは国際交渉や系群保全を含めた研究主体の業務へと転換が図られている。個人的には，漁業者，市民，釣り人等，様々な人のためのサケの保全を考えている。
- G：サケは漁師のものであり，またサケは沿岸では釣れないとの考えが過去にはあった。しかし，サケは沿岸で釣れるし，竿が林立している現状がある。最近，サケ釣りが解禁された川もあるが，盛り上がりはそれほどでもないのので，推進していきたい。サーモンフィッシングや釣り文化のアピール等を通じて，地域密着型の貢献を進めたい。

上田：教育、文化を含め次世代へ繋がるような緩やかな連携をどうするか。自然産卵床の研究による河川の修復等も行われている。

H：石狩川対策として、将来は旭川までサケを帰したい。そのための種卵確保が行政的な壁。

E：教育用に上限はないはずだが、増殖用種卵確保が最優先のため難しいかもしれない。

（編者註 道水産林務部の運用では 5000 粒を目安としている）

A：親魚や種卵の供与可能数が曖昧。

E：過去の流れで目安となったのかもしれない。

上田：情報交換を通じ、地域の要望を把握し、新しい試みをすることが大事か。

I：サケに関する取り組みは大河川が先行し、小さな町や小さな河川との格差が広がっている。小さな意見も取り上げてほしい。サクラマスを増やすために河川環境を守る運動や、人工孵化放流の意義を子供たちに教える活動を行っている。情報提供をお願いする。

上田：資源、食文化、流通からの話題はないか。

C：ネット上での情報交換から始まると思うが、流通加工に関する質問は受けることができる。流通における情報だが、諸外国の海産物に対する需要拡大にともない、日本では輸入海産物が入り難くなっている。将来、食べる魚がなくなる可能性もある。食文化や食育の普及の観点から、子供向け料理教室を開き裾野の拡大を図っている。

上田：サーモン協会とネットワークの関係はどうなっているのか。

木村（サーモン協会）：当初、ネットワーク活動はサーモン協会の一事業として計画したが、協議の中で目的が発展し会員の範囲も広がり、独立した組織を目指すことにした。理念は当協会と一致するので、今後はネットワークの一員として協力する。

上田：釣り団体の交流や協議の場はあるか。

G：様々な釣り団体があるが、マナー向上やライセンス制等を検討したい。また、子供に生きた魚を触らせる機会を設けるとともに、魚が生き物であると同時に食べ物であることを教える啓蒙活動に繋げたい。釣り人が歓迎されるムードではないので、受け入れてもらえる連携をとりたい。

上田：ライセンス制になっても釣りたいものか。

G：世代間に違いがある。年配の人は魚捕り、食料確保の意識が強いが、若い人はリリースする。規制は無い方が良いが、ライセンス制の検討も必要。しかし、混乱を起こさないよう、時間をかけて導入してほしい。

浦野（北大教授）：サクラマスの放流事業では、釣りによる減耗も大きいと聞いている。立場の違う人たちが本音で話し合い、行政へ働きかけることも必要ではないか。

上田：問題の洗い出しをする必要がありそうだが、ネットワークで扱うサケの種類はどうか。

木村：提案者としては、サケは一つの象徴で、自然全体をテーマとして扱いたい。

浦野：地元の人たちが自然に関する情報を持ち寄る会になれば良い。

E：サクラマスの増殖は難しい。ゾーン化することは可能かもしれない。

H：サケに対する関わり方は多様なので、接点を見つけるための場作りが大事で、この会は出来たことに意義があり、今後の礎になれば良い。

上田：このような会を持続的に発展させるのは難しい。会長と事務局が方向性を見いだし発展させてほしい。情報提供になるが水産学会支部大会が 12 月に開催される。興味のある人は聴きにきてほしい。

木村：会員増への呼びかけをお願いし、締める。